

錦織監督

映画の現場から



●●39

「渾身」全国キャンペーン報告①

映画「渾身」 KONS HIN」のキャンペーンの話題に触れたい。既に東北6県はもとより九州や関西を回り、これから東海地区や広島、北海道などまだまだ「巡業」は続く。

全国の試写会で共通することは、この隠岐の島の人々の営みの映画が、日本の心の映画と受け取られているということだ。長野県松本市の市長さんは郷土愛あつてこそその行政の取り組みであるとおっしゃり、富山市の市長さんとは日本海文化圏の話になった。三村青森県知事は「相撲は青森、映画は渾身」と地元メディアの前で応援メッセージをくださった。

島根発の映画は地方発信映画というくりで中央メディアから報道されがちだが、自治体の垣根を越えて多くの首長さんから「日本の映画」として応援いただき、本当にありがたい。

福島の女子アナウンサーは、渾身の一シーンの話が

日本の心の映画と受け取る

ら、震災で苦勞している人たちのことが胸に去来したのだから、言葉に詰まりインタビューどころではなくなってしまった。仙台では女川のご夫婦から「元氣をあげよう。明日に希望を持ってない避難所の人たち全員に見せたい。この映画を作ってくれて感謝します」と言葉をかけていただいた。経営する工場も、家も全部流されたご夫婦に逆に元氣づけられ、映画の使命

をあらためて痛感した。岩手では「あのシーンは一体どうやって撮ったのですか？」とインタビュー後に若いアナウンサーから質問された。後半のシーンが「作り事」に見えなかったようで、エキストラである柳翔演じる英明と対戦相手による正三大関戦の迫力に思わず声が出そうになったくらい、物語に集中したとのこと。他の人に言わない

から教えてほしいという。CG満載の映画や、手間暇より効率を優先する現在の日本映画を見ている若い世代には不思議に映ったようだ。CGはデジタルの発達によって今やコスト削減の手段。サッカーワールドカップやオリンピックで応援する人々の姿を見ることはあっても、生身の人間が心を一つにして「本気」で応援している様子を劇映画で見ることがないのかもしれない。それは、本気で島を思い、本気で隠岐相撲を愛し、良い映画にしてほしいと本気で思っている協力してくれた島の人たちの「心」が映っているからだと思っている。

こんな映画は世界広しといえども、他にない。伝統文化を守るためではなく、(結果守っているけれど)、島を、相撲を愛し、家族を愛している人がたくさんいる島だからこそ、多くの文化もまた伝承され残っているのだと、キャンペーンで全国を回りながらあらためて感じている。そんな隠岐の島を誇りに、一人でも多くの人にこの映画を届けた



島根県隠岐の島町での「渾身」完成披露特別上映会で舞台あいさつする左から主演の伊藤歩さんと青柳翔さん。隠岐島文化会館

(錦織良成・映画監督)

第2、4金曜掲載